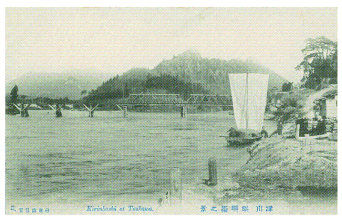
(C)新潟日報社　無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します

第３種郵便物認可　(日刊)　新　潟　日　報　２０１８年(平成３０年)９月２５日（火曜日）　全面広告　4

fumufumu

阿賀野川と日本海がつないだ新潟と福島の縁

これからもずっと、大切にしたい

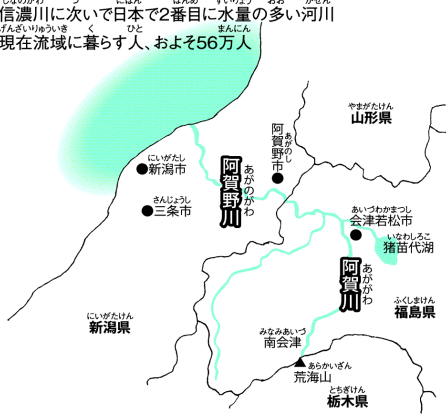


新潟 × 福島 Vol.2
NIIGATA & FUKUSHIMA

新潟県と福島県。2つの県の関わりが深いのは、その昔、阿賀野川を舟が行き交い人や物をたくさん運んで交流してきたからです。そして、阿賀野川で新潟港に運ばれたものは、日本海から大阪や北海道など、もっと遠くへ運ばれました。この阿賀野川でつながる両県から公募で集まった小学生やその保護者が海や川を好きになって大切にする心を育む「川もり海もりプロジェクト」に参加。阿賀野川で運ばれた代表的なモノの「塩」と「鉄」の2つのコースに分かれて、さまざまな体験を通じて、阿賀野川と海と港の大切さ、両県の関係を考える体験をしました。

阿賀野川・阿賀野川 DATA

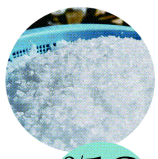
- ●源流「荒海山」から河口まで延長210キロメートル
- ●信濃川に次いで日本で2番目に水量の多い河川
- ●現在流域に暮らす人、およそ56万人



日本財団「海と日本PROJECT」は、日本人の暮らしを支えてくれている海を学び、体験し、未来へ引き継ぐアクションの輪を広げるための取り組み。今年、その一環として新潟で行われたプロジェクトを3回にわたり紹介します。

2回目は「川もり海もりプロジェクト・阿賀野川編」。みなさんもぜひ、海について学び、海へ出かけ、海を好きになってください。

8/18 19 塩コース



味付けや保存食作りに欠かせない塩は、日本では主に海水から作られます。昔は新潟で盛んに作られて海のない会津に運ばれ、会津からは海水を沸かすまきが阿賀野川を下って新潟に届きました。佐渡は新潟港と一緒に150年前に開港し、現在も昔ながらの塩作りが行われています。8月18、19日、両県の小学5、6年生が一緒に佐渡を訪ね、塩をはじめとする海の恵みについて学びました。

みんなと一緒に海水から塩を作る体験をしました。海水は、私たちの食べ物に使われています。だから海は、きれいであってほしいと思います。

（郡山市富田東小5年）

「塩」も海の恵み

佐渡へ向かった新潟・福島の小学5、6年生40人は、七浦海岸の夫婦岩の塩工房へ。塩は、日本では主に、海水を集めて干したり沸かしたりして水分を蒸発させて作られてきました。子どもたちは、塩作りの工程を学ぶとともにバケツで海水をくみ上げる作業がとても大変なことや、海水を沸かして水分を蒸発させるためにたくさんのまきが必要なことを知りました。

海は楽しみいっぱい、生き物もいっぱい、でも危険もいっぱい

塩作りを学んだ後、海水浴場ではライフジャケットの着用法、おぼれたときにどう対処するかを教わりました。

「ライフジャケットが脱げないようしっかり締めるのを忘れないこと」「おぼれたときは助けを呼ぼうとして手を上げると体が真っすぐになって沈んでしまうからやってはダメ」「落ち着いて空を探し、その方向を向く」を教わりました。

その後、グループに分かれてバナナボートとジェットスキーを体験。広い海原を時速70キロのスピードで進むと、大きな歓声が上がりました。

体験2日目には、海の生き物について学ぶため、釣りやカニ捕りも体験。

海は危険なところもあるけれど、楽しく遊べたり、私たちにたくさんの恵みを与えてくれていることに気づくことができました。

多くの人に伝えたい、貴重な体験

2日間さまざまな体験をした子どもたちは、「川と海と暮らしの関わりが分かったのでこれから大事にしたい」、「もっとたくさんのことを学んでお隣同士仲良くなりたい」などそれぞれの感想を語り、川と海がつないでくれた縁を大切にしていこうと誓いました。

◀新潟市歴史博物館みなとぴあで新潟と福島のつながりや、江戸時代の舟運を学びました。

8/25 鉄コース

昔、港と阿賀野川を通じて運ばれた、農作業に欠かせないくわや鎌。鉄の原料は、新潟港から信濃川を通じて三条で金物になり、阿賀野川で会津に運ばれました。

8月25日、両県の小学3年以上の親子40人が新潟と三条を訪ね、鍛冶体験などを通じて、阿賀野川と港が果たしてきた役割やこれからの新潟、福島の関係づくりについて考えました。

五寸くぎがだんだんとペーパーナイフの形に変わって、職人さんがベルトサンダーで形を整えると一気に本物のナイフになっていくのがすごいと思いました。

（新潟市北区 男性）

鉄をたたいて「道具」に変える

江戸時代後半から農機具や包丁、はさみなど金物の町として知られるようになった三条市。鍛冶道場では、くぎを熱して鍛冶たたき、ペーパーナイフを作りました。炎が上がるコークスの炉に五寸くぎを入れて数十秒待ち、くぎが赤くなったらハンマーで何度もたたいてナイフの形にしていきます。ハンマーが重くて上手に打ち付けられず、教えてくれた職人さんたちから「もっと強くたたいて！」とあちこちで声が上がりました。

子どもたちは「くぎからナイフが作れる」こと、そして「簡単そうに見えて自分で作ると難しい」ことなどに驚いていました。

金物はたたいて直して 生涯使える

土を耕す道具、「くわ」を現在も4000種以上製造している相田合同工場では、工場見学と鍛冶について話を聞きました。くわは、土の質や作業内容に合わせてさまざまな形があります。長く使って欠けたり割れたりしても、熱して鉄を付け足して修理ができるだけでなく、体格や年齢に合わせて使いやすいように形を少し変えて生涯使うことができる道具だそうです。

新潟に港があったから原料を運ぶことができ、川があったから必要なモノを運ぶことができたこと、そして、運ばれたモノは修理しながら大切に使われたことを知りました。

川の流れから文化の発展が始まったことを改めて知り、福島県とのつながりが大変深いことに驚きました。親子で地域の歴史を知り、技術を体験できて良かったです。

（大沼郡会津美里町 女性）

海のこと、川のこと、もっと詳しく調べてみよう!

日本海
川もり海もりプロジェクト
HPはこちらから

川もり海もりプロジェクト
海と日本プロジェクト2018 子ども流域連携体験交流 新潟×福島

●主催 新潟開港150周年記念事業実行委員会
（新潟市2019年開港150周年推進課内）TEL.025-226-2162
●共催 新潟日報社、福島民報社

企画・制作 新潟日報社広告局